

# BOOKS

久原正治

立命館アジア太平洋大学経営大学院 教授

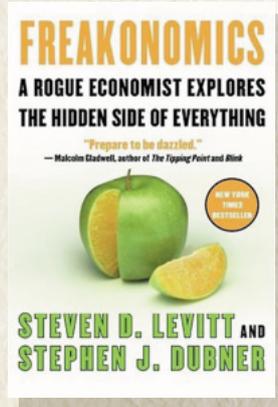
## シカゴの酔狂な経済学者

夏休みにシカゴの下町の社会人MBAクラスで教えている。教科名は「日本の経済、経営、金融」。一六名の受講生に聞くと、日本に興味があつてこのクラスを取っているのはわずか三名、後は他に適当な科目がないので単位を埋めるため仕方なく取っている模様だ。夕方五時四十分から九時までの授業だが、皆仕事を終えた後時間通

り出てきて、八時半ごろになると帰り支度にそわそわし始める。新しい知識に対する学習意欲よりは単位を取得し早くMBAを得たいという意欲をひしひしと感じる。アメリカでの毎日の国際経済クラスは中国一色だ。八〇年代後半の日本一色だった時代を懐かしく思い出す。授業でも二〇回中二回中国を取り上げることになった。学生の多くが日本など中国の一部しか思っていないのであるから仕方がない

こちらに来て最初に本屋で見かけたのが「Freakonomics」(酔狂経済学)と題する経済書の平積だ。発売

以来一四週連続でNYタイムズ、フイクションハードカバー部門のベストセラーで、七月末現在二位となっている。経済書でこれだけ売れるのは異例といえる。本屋のレジでこの本を渡したら店員が相撲の話も出ていて面白いと言い、もう一人の店員も肯いていた。著者の一人(もう一人は編集者)はシカ



### Freakonomics: A Rogue Economist Explores the Hidden Side of Everything

Steven D. Levitt & Stephen J. Dubner  
William Morrow  
2005年5月

部を紹介してみよう。

九〇年代以降のアメリカでの犯罪率の低下の原因は経済の活況や警察の検挙能力の向上にあるのではなく、一九七三年の墮胎を合法化した最高裁判決にある。望まれない子供の出生の減少は、それがなければ生まれたであろう彼らがティーンテジャーになる九〇年代に入ってから犯罪率減少に最大の影響を与えた。麻薬ディーラーの組織は企業組織と

ゴ大学の若手経済研究者で、四〇歳以下の優れた経済学者に二年に一度与えられるクラーク賞も得ており、将来性のある経済学者のようだ。彼によれば、そもそも経済学とは酔狂なもので、日常見られる疑問や問題意識を人間行動の経済上のインセンティブの観点から仮説化し、それをデータにより実証するものとされる。著者の主たる関心は人間が犯す不正や犯罪の動機にある。ここで論証される仮説の一

同様の効率的なもので、末端の売人は最低賃金以下で四人に一人は殺されるリスクを負ってでも下積みから組織に入る。トーナメント式の昇進と長期勤続によりトップへの階段を上るインセンティブが大きいからである。一般に人間行動のインセンティブは勝つたり向上したりすることにあるのだが、相撲のデータを見ると、八百長が合理的インセンティブとなっている

ことが分かる。七勝七敗の力士は千

秋楽に八勝六敗の力士に勝つ確率が高い一方で、同じ取り組み相手が次回対戦するときには、前回勝つたほうが八〇%以上の確率で負けている。この酔狂経済学者の視点の面白いのは、人間行動に関し一般に常識と思われていることをデータにより覆していき、思いがけない仮説を読者の前に論証し提示する点にある。市場経済

の国アメリカでは、あらゆる専攻の学生が教養課程で理論経済学を何科目か取らされ、事実に基づくデータを集めた経済現象の説明法を叩き込まれる。学生が嫌うのはグラフや数式の多さだが、それを使わず分かりやすい文章だけでこのシカゴで日常的な不正や犯罪の身近なテーマについて面白おかしく説明していくこの本は、経済学的思考法に慣れた米国人にとって大変興味を引くもののようにである。